⑵ 企　画　展　示

村岡花子展　ことばの虹を架ける～山梨からアンの世界へ～

期　間　平成26年４月12日㈯～６月29日㈰　69日間

趣　旨　世代をこえて多くの人々に愛されている「赤毛のアン」―。この作品を日本で初めて翻訳し紹介した村岡花子（1893～1968）は、山梨県甲府市に生まれた。５歳で東京に移り、21歳のときふたたび、山梨英和女学校の教師として甲府へもどって、ここでの５年間で作家としての足がかりを築いている。子どもも大人も楽しめる家庭文学をめざした花子の文学の基本には、東洋英和女学校で身につけた英米文学への深い教養があり、一方で、歌人・佐佐木信綱のもとで短歌を学び、折々の心を歌に残した青春時代があった。明治・大正・昭和の激動の時代を生きた花子の生涯と、その文学の原点を紹介する。

監　　修　村岡美枝・村岡恵理

展示構成　プロローグ
- Ⅰ　東洋英和女学校時代
- Ⅱ　ふるさと山梨での日々
- Ⅲ　幸福と悲しみと
- Ⅳ　女性たちの力
- Ⅴ　「赤毛のアン」誕生
- Ⅵ　戦後の仕事

谷崎潤一郎展　文豪に出会う

期　間　平成26年９月27日㈯～11月24日（月・祝）　54日間

趣　旨　明治から昭和にかけて、「痴人の愛」「春琴抄」「細雪」など現代に読み継がれる名作を残した文豪・谷崎潤一郎（1886～1965）。なかでも「細雪」は1939（昭和14）年から執筆をはじめ、軍部の弾圧で連載中止になりながらも、終戦をはさむ８年の歳月をかけて完成した。『細雪』下巻には、1942年に松子夫人と河口湖畔の富士ビューホテルに滞在したときの情景が、描かれている。一方、「源氏物語」の現代語訳にもとりくみ、戦前戦後にかけて３度刊行された。戦後も引き続き旺盛な創作力で、「鍵」「瘋癲老人日記」などで話題を集めた。
本展では原稿、書簡、書画など約120点の資料により、谷崎潤一郎の生涯と豊穣な作品世界に迫る。

編集委員　千　葉　俊　二
（早稲田大学教授）

展示構成　Ⅰ　文壇登場
Ⅱ　文豪への道
Ⅲ　「細雪」の世界
Ⅳ　絢爛の美